国語科　学習指導案

日　時　平成 17 年 9 月 27 日（火）５校時
学　級　１年１組（男子 19 名　女子 17 名　計 36 名）
場　所　１年１組教室
授業者　菊　地　　純

1　単元名　　五　古典と出会う　　（　教材名　『竹取物語』　）

2　単元について

(1)教材観

本単元は、『竹取物語』『今に生きる言葉』とで構成され、古典の文章に出会い、古文を理解する基礎を養うと共に、古人のものの見方や考え方に触れて自分のものの見方や考え方を広げ、古典への関心を高める単元である。

本教材、『竹取物語』は『源氏物語』において、「物語の出で来はじめの祖」と語られる、日本最古の物語であり、生徒が初めて接する古典の物語としてふさわしい価値を持っている。また、この物語は、「かぐやひめ」として、幼い頃耳にしたり目にしたりしてきたもので、たいへんしたしみやすい作品でもある。文体も簡潔で、理解が困難な語句も少なく、比較的読みやすい。また、登場する人物の心情も、非常に人間味あふれ、現代人との共通点を見いだせる。このような特性から、本単元のねらいである、古文を理解する基礎を養うことや古典への関心を高めることに適していると考え設定した。

(2)生徒の実態

生徒は小学校６年時に短歌や俳句の学習の中で、わずかに古典的な語句にふれる経験をしてきているが、一つの単元としてきちんと向き合うのは、中学校一年における本単元が一番最初である。生徒のほとんどが『竹取物語』のストーリーにふれたことがあり、物語の面白さに対する期待は大きい。そのため興味・関心を持って取り組めるであろう。その興味・関心を生かすためにも、本単元において、いかに古典と出会わせるかが非常に重要であるといえる。

本学級の生徒は、音読の場面では、やや声が小さくなりがちである。特に自分が注目されない場面に置いては、口をほとんど開かない生徒も見られる。しかし、新しいものを学習するということに対して興味・関心を強く示す傾向があり、中でも新しい語彙の獲得に対して意欲的に取り組む。発言を求めれば、積極的に挙手をする場面を多く見られ、学習に対する姿勢は前向きといってよい。

そこで、古文を理解する基礎をしっかりと身につけさせること、古人の心情を想像し、現代人との共通点を見いださせることによって、古典の面白さを味わわせたい。さらに、音読の機会を多く設定し、古典の持つリズムの良さを味わわせ、音読の楽しさを実感させたい。

(3)基礎・基本の定着

本単元における基礎・基本は、「語句の意味を正しく理解して音読ができること」であると考える。古典に親しむ態度を身につけるには、まず、内容を正しく読み取るための学力が不可欠である。その学力とは、中学校一年生の段階では、「歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して読む力」「現代にない語句や現代とは異なる語句を理解する力」「主語や助詞が省略されていることに気づく力」の３つであると考える。

本単元における基礎・基本を定着させるためにの手立てとして、家庭学習では音読練習を、授業では原文と現代語訳との交互読み、歴史的仮名遣いや、語句の意味を問う確認問題を取り入れたい。

3　単元の目標

（1）古人の生活や価値観を知ることで、古典に親しむ態度を身につけることができる

（2）古文・漢文をくり返し音読し、読み慣れるとともに、古人の生活や生き方を自己の経験に結びつけて想像することによって、古典を読み取ることの基本を身につけることができる

4　単元の評価規準と評価計画・指導計画（１２時間扱い）

時	評価規準 指導目標	国都への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
		⑴ 古典の文章に出会い、言葉使いの違い、古文・漢文の持つリズムなどに興味や関心を持ち、すすんで古文を読もうとする (2) 古人のものの見方や考え方に触れて、自分のものの見方や考え方を広げようとする	(1) 古文の仮名遣いや文末の言葉の違い、現代では使われない言葉や意味の違いに注意して音読する (2) 口語訳などを基に話の内容のあらましをとらえる (3) 古人のものの見方や考え方を読み取り、それに対する自分の考えをまとめ、ものの見方や考え方を広げる	(1) 歴史的仮名遣いや、古語と現代語の意味の違いについて理解する (2) 古文や漢文特有の表現や語彙、名句名言、故事成語の知識を獲得しようとする
1	単元の学習内容を把握し、かつ古典に対する興味・関心を持つ	(1)		
2	仮名遣いや言葉の意味に注意して、冒頭の部分を正しく音読する		(1)	(1)
3 4 本時	古文に表れている人々のものの見方や考え方を理解する		(3)	
5	内容を理解した上で、古典のリズムをとらえて音読する（暗唱）		(3)	
6	「竹取物語」の他の場面を読むことで、古典の世界に親しむ	(2)		
7	中国の古典に由来を持つ言葉について知る	(2)	(3)	
8	「矛盾」の書き下し文を音読し、漢文特有のリズムになれる	(1)	(1)(2)	(1)
9 10	名句・名言、故事成語について調べ、分かりやすくまとめる	(2)		(2)
11	名句・名言、故事成語について調べたことを分かりやすく発表する	(2)		(2)
12	単元で学習したことを確認する		(2)	(1)(2)

5　本時の計画

（1）目　標

古典に表れている人々のものの見方や考え方を理解することができる　　（読むこと）

（2）指導の構想

①　本校国語科では、研究主題である「基礎・基本の定着を図る学習活動の工夫」の具体的な取り組みとして、家庭学習と授業の連携を進めており、「教科書の音読」もその中に位置づけられている。また、始業時のベル学習に教科書の音読を取り入れるなど、古典学習で最も重要である音読の機会を多く与えたいと考える。また、歴史的仮名遣いの正しい読みや古語の意味をしっかりと確認させることで、古典の音読に対する抵抗を無くしていきたい。

②　くらもちの皇子が語った話をかぐや姫はなぜ信じてしまったのか、くらもちの皇子の表現力や言葉の巧みさに感心させながら、現代と古典の世界に生きる人々の共通した心情や価値観に思いを至らせ、それを読み味わったおもしろさを音読の工夫につなげたい。

（3）家庭学習との連携

	A	B	C
課題２	歴史的仮名遣いに注意し、古文のもつリズムを味わって音読練習する	歴史的仮名遣いに注意しながら音読練習をする	・確認問題の間違ったところをノートに練習する ・歴史的仮名遣いに注意して音読練習をする
課題１	・蓬莱山の様子がよく分かる口語訳の部分に傍線を引く。 ・歴史的仮名遣いに注意して、音読練習をする。		
課題２	言葉のまとまりに注意して、古文の持つリズムを味わって音読練習する	言葉のまとまりに注意しながら音読練習をする	・確認問題の間違ったところをノートに練習する ・歴史的仮名遣いに注意して音読練習をする

（4）具体の評価規準

	評価の観点		C（努力を要する生徒への手立て）
	A（十分満足できる）	B（概ね満足できる）	
読む能力	古文や口語訳を対応させながら読み、蓬莱山の情景やくらもちの皇子の言葉巧みな様子をイメージ豊かに思い描き、古人の心情を自分の経験と照らし合わせて理解しようとしている	古文と口語訳を対応させながら読み、くらもちの皇子の言葉巧みな様子や蓬莱山の情景などをとらえ、それについて自分なりの感想を持つことができる	色やものの名前に注目させながら、古文と口語訳を対応させながら読み、書かれている内容を理解させる

（5）展開（Ｓｔｅｐ2）

	学習内容	学習活動	指導上の留意事項	評価の観点・方法
導入 10分	1　既習事項の確認 2　学習課題の把握	1　既習事項の確認 (1) 確認問題 (2) 前時部分の古文を音読（一斉） 2　学習課題を把握する	・確認問題の配布	
	学習課題：　くらもちの皇子はどのような人なのだろう			
展開 30分	3　古文の音読	3　古文を音読する (1) 教師の範読 (2) 歴史的仮名遣いの確認 (3) 音読（一斉・個人）	・教師の範読の後、少しずつ区切って後につけて読ませる	
	4　課題解決の見通し	4　課題解決の見通しを持つ	・頭のよい人 ・ずるい人 ・目的のためなら手段を選ばない人 ・お金持ち ・行動力のある人	
	5　課題の追究	5　課題の追究 (1) 古文と口語訳を交互に読む (2) 蓬莱山の様子が具体的に描写されている部分を読み取る (3) 最後の部分をくらもちの皇子はどのような気持ちで言ったのかを考える	・音読のポイントの指示 ・主語や助詞が省略されていることに気づかせる ・現代語と意味の異なる語に気づかせる ・口語訳に傍線を引いてくる予習を生かして、対応する古文に傍線を引かせる ・蓬莱山の様子のすばらしさをもっと信じさせよう ・これでかぐや姫と結婚できる	【読む能力】古文と口語訳を対応させながら読み、蓬莱山の情景を語るくらもちの皇子の言葉巧みな様子をとらえ、古人の心情について自分なりの感想に持っている（観察・机間指導・ノート・プリント）
	6　課題の解決	6　くらもちの皇子がどのような人物なのかを発表する	・自分の経験に重ね合わせたり、根拠を明らかにして発表させる	
終結 10分	7　学習事項の明確化 8　学習評価 9　家庭学習との連携	7　リズムをとらえて音読する 8　自己評価をする 9　本時の復習（課題２）と次時の学習内容と予習（課題１）の確認をする	・学習課題を確認 ・自己評価カードは事前に配布	